

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 三宅 沙侑美 |
| 授与した学位 | 博士 |
| 専攻分野の名称 | 学術 |
| 学位授与番号 | 博甲第 7319 号 |
| 学位授与の日付 | 令和 7 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 社会文化学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当) |
| 学位論文の題目 | 介護士のソーシャルスキル —介護サービス利用者と良好な対人関係を構築するために— |
| 論文審査委員 | 教授 田中 共子 (主査) 教授 東條 光彦 教授 安藤 美華代 准教授 町田 尚史 |

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、介護士のソーシャルスキル（以下、SS とする）向上に寄与するために、介護士の SS を明らかにし、それに基づいた教材の収集、SS のアセスメントおよび学習効果測定ツールの開発を行うことであった。

第 1 章では、我が国の介護士の現状と課題について考察した。介護サービスの需要が増加する一方で、介護士の人材不足や高い離職率が深刻な問題となっており、介護士の質の向上も重要な課題であった。介護士の量と質を改善するためには、介護士の対人関係能力の向上が課題解決の一助となると考えられた。そして、介護士の対人関係能力を向上させるためには、その能力を可視化することで、現行の国の施策に基づいた実効性のある取り組みを提案できると考えられた。

第 2 章では、介護士の対人関係能力を SS として捉え、国内外の介護士の SS に関する先行研究を調査した。その結果、介護士の SS の向上が、介護士自身の職業生活において有益であることが示唆されていた。しかし、国内外ともに介護士の職業的な SS を調査した研究は限られていた。介護士の SS を向上させるためには、介護士の SS の特定、さらには SS 学習のための教材集めや、介護士の SS アセスメントおよび学習効果測定のためのツール開発が今後の課題であると考えられた。これらの課題に対応するため、第 3 章から第 7 章にわたり、5 つの調査を実施した。

第 3 章では、通所施設および入所施設に勤務する介護士 11 名を対象に面接調査を行い、介護士が利用者と良好な対人関係を形成するために必要な SS を抽出し、分類した。その結果、介護士の SS として 5 つのカテゴリを得ることができた。また、これらのカテゴリは、認知的な SS を含む土台スキルから基礎スキル、そして応用スキルへと階層構造の可能性が示され、カテゴリ間の関係性も示唆された。得られた結果を実践的な介護士の SS 学習へ繋げるためには、介護士が勤務する施設種ごとの違いを考慮した調査が必要であると考え、第 4 章以降ではデイサービスに勤務する介護士（以下、デイサービス介護士とする）に焦点を絞り、調査を実施した。

第 4 章では、デイサービス介護士 3 名を対象に観察研究と事後面接調査を行い、介護士の行動面および認知面の SS を抽出し、分類した。その結果、観察研究からは、介護士の行動面における SS を得ることができ、事後面接調査からは、行動面の SS の行使に至った認知面の SS を得ることができた。そして、観察された場面ごとに、介護士が使用した認知面の SS と実際に行使した行動面の

SS がどのように関連しているのか、文脈に即した情報を得ることができた。この結果は、SS 学習の教材として活用できると考えられた。

第5章では、第3章および第4章で抽出されたSSを素材に、デイサービス介護士のSS尺度群(Day Service Care workers' Social Skills Inventories : DCSI) 原案を作成した。このDCSI原案は、「自己管理」, 「観察・推察」, 「自立支援」, 「非言語表出」, 「言語表出」, 「配慮」, 「関係調整」, 「チーム連携」の8つの尺度から構成された。次に、デイサービス介護士500名を対象に質問紙調査を行い、DCSIの信頼性と妥当性を確認した。DCSIは、介護士自身のSSを可視化するための有用なツールであり、SS学習の効果を評価する際にも役立つと考えられた。

第6章では、DCSIの作成過程で見出されたデイサービス介護士が利用者との関わりをどのように捉えているのかに関する認知・感情面の項目を素材に、介護士の利用者との「関わり肯定感」尺度原案を作成した。次に、デイサービス介護士500名を対象に質問紙調査を行い、「関わり肯定感」尺度の信頼性と妥当性を確認した。「関わり肯定感」尺度は、SS学習の際に介護士に利用者との関わりについて振り返りの機会を提供することに有用であると考えられた。また、SS学習プログラムを作成する際には、介護士の肯定的な受け止め方を高める方法を取り入れることで、学習への意欲を引き出し、効果的な学習へと繋げることができると考えられた。

第7章では、デイサービス利用者208名を対象に質問紙調査を行い、利用者が介護士に信頼感を抱いた場面を分類し、分類した各場面における介護士の関わりを分類した。その結果、信頼感を抱いた場面は【場面限定なし】、【困りごとがある場面】、【日常動作場面】、【会話場面】、【特別な場面】の5つのカテゴリが見出された。さらに、介護士の関わりを分類した結果、最も多くみられた【場面限定なし】と次に多かった【困りごとがある場面】から、【気遣い】、【安定感】、【会話の要領】、【トラブル対応】、【接遇】、【自立支援】、【元気を与える】、【家族との関わり】という8つのカテゴリが見出された。これらのカテゴリは、介護士の視点から得られたSSの結果と概ね一致していた。この結果は、介護士のSS学習におけるターゲットスキルの選択に寄与し、SS学習の教材としても活用できると考えられた。

第8章では、第1章から第7章で得られた結果を基に、デイサービス介護士のSSの特徴やデイサービス介護士に対するSS学習への応用可能性について議論し、今後の課題について考察を行った。

論文審査結果の要旨

予備論文からの変更点を中心に、本論文の構成と内容について説明があり、続いて質疑が行われた。予備論文からの主な変更点は、以下の通り。題が長かったので短く改めた。介護や介護士を巡る国レベルの取り組みと社会の動きを追記した。SS のとらえ方と適用範囲、対人関係に着目した理由、日本と海外の SS のとらえ方、観察研究の意味、今後の課題について加筆した。尺度への当てはまりを示す数値を詳細化した。知見の繋がりを可視化するため、全体の総括図を作成した。

評価するコメントには、以下が見られた。指摘を受けた点について、修正されていることが確認できた。社会の変化への対応が書き込まれた。展望が丁寧で、尺度構成が手堅い。刊行された複数の論文をロジカルに組み立てており、全体の流れに違和感がない。修士からの5年間を有意義に使う、介護士スキルの研究の土台を構築した。

質問には、以下があった。海外の知見をなぞらず日本で独自に研究を興した理由と意義は何か。海外 SS とはなぜ違いが生じるのか。表題を変更した意図は何か。デイサービスの特徴的 SS とはどういうものか。類似概念についてどう検討したのか。質的研究に基づいた尺度構成だが、実践に際してそのアウトカムはどう定めるのか。SS の行使は、利用者のみならず介護士本人へも影響を及ぼすのではないか。介護士の離職要因として、対人関係以外の影響はどうみるか。調査地域が特定の県内なので、知見の限定性への言及が必要ではないか。別分野でも使われる用語には、意味合いの差異への注意が必要ではないか。

今後の課題としては、以下の指摘があった。SS を安定的に発揮できるコンディション作り、介護の質を保つための自己管理の方法が必要になる。自己評価式の測定には限界があるため、効果の実証として介入研究の実践が期待される。介護士の下位カテゴリごとのデータ蓄積、スキルの全体構造の検討、項目数の多さへの対策、スクリーニングやモニタリングのための指標づくり、測定頻度など適用のポイントの開発が待たれる。

本論文の提出者は、それぞれの問いに答えながら本研究の意図や狙いを説明し、記述の及ばなかったところの反省点を述べ、今後の予定と発展の見通しを論じた。本稿を提出した後、現在は尺度の短縮版の作成にとりかかっており、介入実践研究の準備を整えて、実践による変化を多元的に測定する計画があるとして、その中で今回の議論を活かしていきたいと述べた。

基礎から応用に至る展望のもとに進められた開拓的な研究であり、本人の構想は本稿に留まるものではないが、まとまりのよいところまでを報告したものとなっている。総じて堅実な改稿の努力と一貫性ある構成が評価されたが、尺度の精緻化や対象者の多様化、現場での適用性の開拓を視野に入れると、かなり広がりや発展性のある見込める主題といえる。審査での指摘はこれから手がける部分への助言も多く、不備や不足というより今後の課題の共有に力点が置かれ、この先の展開に期待した議論がみられた。全員一致で合と判断した。